

『経済的思考の転回』

桑田学著 以文社 三〇〇〇円 (税別)

〔人間の経済〕が、多様な生物種を含む自然界の健全な循環と再生産によつて支えられることは、甚だ自明に思えるが、近現代の経済学は、むしろその現実を脇に置いて、効率・競争・成長を志向する〔市場〕というロジックと共に発展した。

そして、自然科学こそ学問の王道とされ始めた時代にあつて、経済学は力学を範とし、現実世界の質的な部分を捨象する数学的方法論を採用したのである。

実は同じ時期、ゲデス、ソデイ、ノイラートらは、熱力学の第二法則Ⅱエントロピー増大則を重視する、もうひとつの経済学、更には経済政策を模索していた。

彼らによる経済学は、我々を生かす源泉は貨幣ではなく、太陽エネルギーの恩恵を受けた草木の葉であると、主張する。それは、出来事の不可逆性を無視する一般均衡理論を到達点とする力学系の「近代経済学」とは、完全に別物だった。

だが、ウエーバーやハイエクら自由主義陣営は、自由を否定し全体主義へと至る「科学主義」「計画主義」として、両者を一括りにしてしまふ。それは、経済学にとつて、そして人類にとつて大きな不幸であつた。その結果、資源消費の不可逆性を無視して膨張し続け、「永久機関」たることを自らの宿命とする資本主義が、ソ連を中心とした社会主義陣営の崩壊を受け、暴走を加速させたからである。

いま人類は、世界の全てを数値化し、コンピュータの計算能力を利用して、人の生命も自然災害も国家破綻さえも証券化しながら、ただ利益の増大だけを眼前に置き、破滅への道を突き進んでいる。

閉塞状況にある現代世界に光明を見出すべく、忘れられた経済思想を掘り起こそうとする著者の企図に共感する。(フ)